

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649 FAX(03)329915367
振替 東京01584331 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額500円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

「護憲ネット」二つの集会に参加しよう……………2

社会党右派いよいよ保守新党づくりへ……………3

—— 細川・小沢に対する権力闘争広がる ——……………6

力を合わせ一万人希望退職反対の闘いを……………6

—— 全電通の仲間からの報告 ——……………11

「思想を練り上げ、判断力を養う」……………11

—— 「学習のすすめ」、よりよい社会実現のために(四) ——……………16

■問題提起■

社会党「再生」の真の意味を考える……………14

思考の翼をひろげ、生き様をぶつける……………16

—— 社会党「再生」への私の思い —— 八国共産党(日朝)三月一八日 平野……………17

読者からのおたより……………17

旬刊 社会通信

NO.566

一九九四年三月一日

一九九四年三月一日発行
毎月一日・十一日・二十日三回発行

「護憲ネット」二つの集會に参加しよう

「護憲ネット」(護憲の社会党を再生する全国ネットワーク)の組織化がすすんでいる。会員は五千名を突破、一万人の目標に近づいているという。この稿を書いている二月二十八日、千葉「護憲ネット」結成、前日の二十七日は島根結成総会。東京でも一月二十九日に東京護憲ネット、二月五日「三多摩ネット」が結成された。都区内では中野、渋谷、太田、杉並、練馬、新宿、北、千代田、葛飾等々で進行中だ。

社会党は「国民福祉税」で存在感を示したかのようにみえる。だが、これで「社会党再生は即可能」と考えるのは甘い。連立政権参加下、旧自民勢力のもつとも黒い潮流とのゆ着を強めている。労働組合も「青票議員」の除名要請にみられるように、旧自民勢力に包囲されたかのような状況だ。社会党に生命を賭けたわれわれには、身体をはった理論闘争、実践活動が求められる。もし社会党の「臨終」を手をこまねき見ていけば、私たちの人生は何であったかが問われる。いかなる事態にも備えた準備こそ肝要だ。このような時、「護憲ネット」は二つの集會を企画した。

一つは「ガンバレ 青票・護憲派議員 三・一八国民集會」(日時・三月一八日、午後六時開場。場所・なかのゼロ、中野駅南口下車・徒歩七分)。

もう一つは「護憲ネット」第二回全国総会(日時・三月一九日、午前十時～午後三時。場所・文京区民センター、JR総武線「水道橋駅」・地下鉄都営三田線「春日駅」・地下鉄丸の内線「後楽園駅」下車)。

「護憲ネット」は二つの集會への参加をこう呼びかけている。

「曇天に青空がかい間見えたかのような『青票』のさわやかさは、私どもに希望を与えてくれました。

しかし『新旧』の保守勢力はただちに結束し、二八人の社会党衆参議員が切り拓いた道を塞ごうとしています。小選挙区制はわずか四人の談合で改悪成立が企及まれ、社会党中央は信念ある議員たちを排除・迫害しています。小選挙区制に反対した議員がいることは社会党の誇りであるはずで、『参院で否決したから』と悪い内容になった』などのいいがかりは聞くに耐えません。

もし、真に悪い内容と受け止めるならば、社会党はなぜ談合による妥協を排し歯止めをかけようとしなかったのでしょうか。改悪される問題点を声を大にして訴え、正すための国民運動を呼びかけないのでしょうか。とにかく社会党は小選挙区制導入に向け、なりふりかまわず突っ走ったとしか思えないのです。

けれども、私たちは手をこまねいているわけにはいきません。総保守翼賛体制は、内部抗争をはらみながらも、すでに形成されつつあります。それは、小選挙区制下の総選挙を経て確立し、国民のあらゆる要求を踏みにじり、ついには平和憲法の改悪にまで突き進むであります。

私たちは、まずは勇気ある二八人の皆さんを支援し、その初心である並立制反対、腐敗防止実現を追求するための、三・一八国民集會を呼びかけたいと思います。

そして、二八人の国会議員の皆さんに託す国民運動を提案したいと思えます。

『全国ネット』は昨年一月に開(とき)の声をあげました。まだ三ヶ月しか経って

いませんが、もうすでに数年は過ぎ去ったような気がいたします。連立政権が誕生してから、戦後民主主義の枠組みが次々と突き崩されているからです。とくに、小選挙区制を中心とする選挙制度の導入によって、日本の政治は保守二大政党制の実現に向けて待ったなしの政界・政党再編成の時代を迎えました。当面、私たちにとって最大の関心事は、日本社会党に再生の道が残されているだろうかということですが。

このような時に、『全国ネット』は第二回全国総会を開催することとしました。この切迫した情勢の下で、『どうすべきか』をおおいに議論し、次のステージに備えようではありませんか。前日の集會に引き続きご参集くださるようお願い致します。』

日本社会党、そして日本の政治のゆくえに大きな影響力をもつ、この二つの集會に万難を排し参加しよう。明日の日本をつくるために。

(T)

社会党右派いよいよ保守新党づくりへ

——細川・小沢に対する権力闘争広がる——

“横路新党”で策動の山岸・久保派

小沢・新生と市川・公明が中核の新々党構想は、たとえ細川・日本新党が乗ったとしても、評判が悪過ぎて自民党の一部はもとより社会党や民社党などもこれにはついてゆけないという状況になっている。そこでまたまた風見鳥の山岸連合会長が出しゃばり始めて、「三極」とか「横路新党」などという政界再編に割り込む動きになっている。山岸会長が出てくるとその構想はマスコミ段階で消えるといわれているが、今度の場合は自治労など旧総評系の大単産が賛同する動きもあるだけに当分は騒がしくなりそうである。それにしても連合の幹部共には困ったもので「春闘」も「雇用」にも関心は薄く本業の組合運動を放棄しているというしかない。ことに不況のなかでも生活を守り、賃上げを闘い取るという姿勢はいささかもない。

もっとも「横路新党」で連合が一本化しているわけではない。山岸氏は久保社会党書記長や武村官房長官（さきがけ新党）と個別に会談して新党構想の話し合いをしているが、その一方で対抗軸である小沢一郎（新生党）氏と数人の連合の山岸氏を除いた幹部が会っている。連合というナショナルセンターは横路新党構想でのまとまりはむしろむずかしい。全電通、全通という旧来の右翼労組幹部に、今度は自治労（委員長は北海道出身）が加ったということである。総評系右派労組が拡大し横路新党構想をバックアップしているということである。

横路新党構想の実態を分析すると大旨次のようになる。

① 小選挙区比例代表並立制がいよいよ実現し、早ければ（無理をすれば）今年の秋以降は国会解散Ⅱ総選挙ができることになるので、各党生き残れる体制づくりに入らなければならないという状態があること。そこから展望が見えない社会党、民社党、新党さきがけなどの幹部にあせりが出始めている。

② 社会党右の派閥「デモクラッツ」と連合山岸派は、将来は別として小沢・市川・細川ラインの新保守主義とすぐには組めないわけで（勤労者大衆の反発を恐れて）、細川対武村の権力争いを利用して「社民リベラル」新党構想（社会・民社・さきがけの三党中央）を打上げたのである。党の顔としては横路と武村に加えて大内民社委員長と江田五月元社民連代表だという。山岸氏は当初は集団指導体制でゆけばよいといっている。

③ 横路氏はすでに来春の北海道知事四選出馬は考えておらず「政界再編」を利用しての、国会復帰をめざしており、これを山岸連合と自治労が担いだということである。横路氏は現在の社会党への復帰は考えておらず、考え方も「革新」ではなく「市民主義」を主張している。したがって新党の方向も「社民リベラル」ではなく「民主リベラル」の方がよいといっている。新党名も例えば「市民新党」というようなものを考えているようだ。

④ 一月二十四日の北海道新聞によれば、横路氏が考えている新党の「結党宣言」草案は(一)政財官癒着の既得権益政治の全面見直し、(二)すべての差別の撤廃と個人の自立、(三)平和憲法を土台とした非軍事の国際貢献などを柱にしている、と報じている(しかしこれは立前論であるが)。さらに同紙は「今までの政治の中で蓄積されたもろもろの既得権を全面的に見直す」としたうえで「働く個人とその家族の声を代表する政党をつくりたい」と宣言している、という。そして憲法を高く評価しており、軍事面での国際貢献には否定的な考えだと伝えている。「結党宣言草案」まで用意しているとすれば(横路周辺の準備であつても)、報じられているように北海道政の新年度予算成立は(四月の早い時期)に具体的に動き出すと見られる。

⑤ 社会党は久保書記長を中心に社会党全体(もちろん彼等は左派は排除するつもり)を社民リベラル新党にもつてゆこうとしている。久保氏は「社会党は半世紀の歴史にこだわらないで、新しい時代の新しい革新になるべきだ。社会党が軸だとか、社会党に寄ってこいということではいけない」(北海道新聞二月二十四日)と語り解党の方向を明らかにしている。社会党を解党して「新党さきがけ」という自民党くずれと、永年にわたって勤労者の要求に背を向けてきた民社党と合同した新党をどうして新しい革新といえるのだろうか。

新保守党イコール社民リベラル

横路新党の構想は明らかに新しい保守党づくりである。横路氏自身の考えと「新党結成宣言草案」と一致しているとすれば、その理念、政策に新党さきがけの武村氏らのそれとはかなりの距離がある。武村氏は自民党の後藤田正晴元警察庁長官の直系であり、理念は保守そのものであり、革新性は少しもない。小選挙区制に対する態度をみればよくわかるというものだ。横路新党が武村さきがけと大内民社と一緒になるとすれば、これに加わる社会党側がかつての自民党の路線・政策に限りなく近づかなければならなくなる。どう考えてもこの新党は自民、小沢新々党につぐ第三の保守党とならざるをえない。たしかに二極(保守)ではある。しかし今度の小選挙区制のもとでは市川公明党書記長が指摘するようにそれで選挙に勝てるのかという問題がある。小沢新々党の場合は、新生党の保守基盤プラス創価学会の組織がある。資金力も池田大作名誉会長の支援と小沢氏の金丸ゆづりの一部財界の資金源があり、強力である。小沢新々党となれば自民、社会、民社の一部がこれに加わることになる。したがって候補者の数も揃うわけだ。

それに比べ、横路新党の方は社会、民社共に右派は組織的に弱いという資金力も不足である。山岸連合が頼りであろうが、連合は小沢新々党にもかなり支援をせざるをえないつながり(特に大企業労組の場合は会社幹部の命令で自民党にもつながりが強い)があり、横路新党一本化というわけにはゆかない。ムードの面でも小沢新々党に日本新党が加つておれば横路・武村組よりは小沢新々党の方が財界・マスコミの支援の力が優っており、一人区のたたかいでは横路新党は大きくは勝てないであろう。選挙区によっては選挙協力ので

きるところもあるが、その有効性は少なく自民党に「漁夫の利」を与えることにもなる。小沢新々党のなかでは、公明党の幹部は大きな顔をするようになるが、現在の市川公明書記長が三役入りということになり、「政教一体」は益々進み、新保守主義・新国家主義の政治体制が強くなる。

村山富市社会党委員長を中心とするいわゆる「主体性派」といわれる部分はどう対処しようとするのか、きびしい選択を迫られよう。もともとこの派の中心人物は旧政構研の右派出身であり妥協性が強い。人の良い村山氏を中心に、大出俊、山口鶴男という元国対族に、中間派の島崎讓、野坂浩賢の各氏がこの派の主な人物であるが、このなかには入閣待望者が多く、連立政府を守るという立前論に弱い人達である。加えて連合の圧力にも正面切って立向かえないという弱点がある。そのため右翼の久保書記長に三役会議などでは押し捲くられてしまう場面が多くなるわけだ。

横路新党に村山委員長は「三極」ということですでに賛成しており、党名の変更にも同意している。このまま流される可能性が高い状況である。社会党は全国的に見れば、小選挙区制による次の総選挙にどうすればよいかわからず「混迷」と「無気力」のもとにあるといえる。三月五日の全国書記長会議と四月下旬の中央委員会での今後の党運動の方向を出そうとしているが、技術論に終るであろうし、党自体の流動化が進むものとみられる。

細川連立内閣は分裂の危機

社民リベラル新党構想は細川連立内閣内部と自民党へいろいろの派瀾を巻き起すことになった。その第一は細川内閣の主導権にぎる新生、公明両党にとつては敵対行為となるため、これへの反発がいろいろの姿で表面化しよう。例えば内閣改造で武村官房長官ははずすこと、村山社会党委員長の取り込み、自民渡辺派との提携などが考えられる。これに対して武村さきがけは逆に自民党内リベラル派との接点を求めることになろう。

一方喝喝的けん制も激しく新生、公明などから出されてくる。なんといっても次の選挙で生き残れるかで戦戦恐恐としている各国会議員に圧力をかけ、取り込み、排除の策略をめぐらして新生・小沢、公明・市川のめざす新々党へ引き込む方策をとることになろう。細川首相が内閣改造を強行すれば内閣の分裂状態を生じてくる。その反面消費税、コメ、国家財政、不況対策などの政策面での政策的統一がとれず、細川内閣の支持率も低下することになろう。自民党の分裂、社会党の分裂の可能性もいよいよ拡大しており、細川内閣崩壊の危機も真実味をおびてきている。

このとき社会党護憲派はどうするのか。何よりも実践の強化である。

第一に「護憲ネット」に結集して護憲派は実践活動を強化すべきである。具体的大衆運動を通じて社会党の各級機関を強化し、それに具体的指導性をもたなければならぬ。まさに「党内闘争」を通じてしか党は守れない。

第二に、細川内閣が年内に始めようとしている事実上の消費税の引上げ（すなわち減税の財源をどうするか）に反対し、われわれの側から税の不公平を正す運動を積極的に展開することである。

第三に、社会党中央本部が考えている党名変更、そして社民リベラル派の結集＝横路・武村新党への方向に反対し、党の主体性を確立することである。

第四に、各職場、地域で意思統一のための学習活動を徹底的に行うこと。さらに広げて他の職場と反対党支部、総支部相互の交流を行うこと。

(社会通信政権研究班)

力を合わせ一万人希望退職 反対の闘いを拓めよう

ことしの二月、NTTは九六年度末までに四万三千人の人減らし合理化を強行し、二三十万人から二〇万人体制にすると内外に発表した。

その合理化の柱が十月から三次に分けて実施される一万人希望退職募集であり、第一次募集には四一〇〇人が応募したと報じられた。

それは、「希望」という枕詞は付いているが「強制退職」そのものであり、さらに言うならば闇の指名解雇であるといっても過言ではないといえる。その理由は後述する。

組合員はカヤの外

九月一日のマスコミには「大合理化に募る不安」「必然性ない希望退職」(朝日)、「二〇万人へ削減計画進める」(日経)、「希望退職一万人募る」(読売)、「一万人の希望退職NTTが初」(毎日)等々と一斉に報道された。このニュースは何も知らされていない職場労働者にとつてはまさに寝耳に水の話であった。

「本人の希望・選択に基づき実施」という見出しで、「希望退職募集に決着」という全電通速報(No一九、九三・八・二四)には、この計画は六月一四日に説明があり、地本委員長会議で論議し「強制しない」ことを確認させたので問題ないと判断し、八月二四日NTTと全電通間で合意し、協約を締結したというのである。

しかし、事は全電通労働者・家族のすべての生存権、生活権に直接かわる重大な問題である。だからこそ、園木委員長も「これ(希望退職)が提案されるとすれば組織的にも十分討議し、しっかり対応をはかる」(全電通新聞九三・三・六)といわざるを得なかったのであるが、実際は職場労働者に何ら討議もさせず、周知さえもせずNTTの言い分を鵜呑みにし妥結してしまったのである。まず、このこと自体が組合民主主義を無視した大変な問題である。

闇(やみ)の指名解雇

希望退職募集の内容を簡単に列記すれば――

- 1、「新たな経営改善施策(二〇万人体制)」の実施による摩擦解消、共済年金制度の改定の対応として」一万人希望退職募集を実施する。
 - 2、対象は四〇歳～五七歳の全社員(管理者を除く)である。
 - 3、募集人員は一万人程度で、人員がオーバしても足りなくても三次(第一回は九三年十月、第二～三回は九四年六月と十月)に分けて募集する。
 - 4、そして募集に応じた者には特別一時金(第一回目二ヶ月、第二～三回目九ヶ月)を割増しする。また、四五歳～五五歳の該当者には転進退職一時金も支払う。
 - 5、ただし、再就職の斡旋はしない。また、承認後は取消しできない。
- わかり易く言うと、これまでのNTT合理化の手法(自然減、子会社への出向等)では

四万三千人の人減らし合理化は達成できない、よって「本人希望」という仮面を被せて首切りをすると宣言し、そして、いま辞めないと六〇歳からの年金受給資格がなくなるぞと不安をかきたて、たかだか数百万円のお金でN T Tのため三〇年前後も働いてきた労働者を一万人も路頭に放り出し、後のことは知らないというのである。

不況下の中、全産業が企業リストラという名目で工場閉鎖、人員削減、出向、一時帰休等々の人減らし合理化を行い、大量の失業者がくりだされている現状において四〇代、五〇代の中高年齢者が健康で安心して働ける再就職の道はない。まさに血も涙もないやり方である。

マスコミでさえ「雇用情勢へ大きな影響を与えるのは確実」（朝日九・一）と問題視しているし、労働省さえも「もともと社員数が多い企業だが、一万人にのぼる希望退職というのはこれまで聞いたことはない」「雇用情勢に与える影響は注意深く見守る必要がある」（同）といわしめるほどの大量の首切りを行おうとしているのである。

このような資本の本性まるだしの非人間的、非人道的なN T Tの首切り合理化を看過することはできないし、「本人希望」だから問題ないとN T Tに首切りの承諾を与えた全電通の態度も黙認する訳にはいかない。

女子社員、「団塊の世代」がターゲット

一次募集で四一〇〇人の応募者がたことに対して、N T T児島社長は「五〇〇〇人ぐらいは出るかと思ったが、まあ予想通りの数字」（毎日十・二八）と発言したという。

この発言の意味するところは、希望退職の募集を始める時には、すでにN T Tとして一万人という数字に確信を持っていたことを示唆している。

N T Tは平成四年度末（九三年三末）二二万二千人の社員数があるが、一万人希望退職が目論見どうり実施できれば、平成八年度末（九六年度末）には二〇万人となり企業体形が大幅なスリム化が図れる（通信興業新聞九・六）、と計算している。

「新たな経営施策」合理化による、番号案内の大幅集約、営業窓口や一―三などの統廃合によって、向こう数年内に相当数の社員が転勤や配置転換を強制的に実施させられる。

これにより「転勤困難」な中高年齢層を退職に追い込もうというのが狙いである。

昨年（九二年度）は転進制度を実施したところ中途退職者は一昨年の約二倍（一万一四〇〇人）もでた。子会社への出向を含めると一万七七〇〇人の人減らしが達成できたといっている。そして、さらに向こう四年間で三万二千人の人減らしを貫徹させるためには、新採を九〇〇〇人と考えると、実質四万一千人の人員減が必要となるわけである。

N T Tはその内訳を次のように考えている。

T E会社への一方通行出向（期限無しの在籍出向）で一万五〇〇〇人

定年退職者が四〇〇〇人

自己都合退職者として一万二〇〇〇人

の合計三万一〇〇〇人を見込んでいる。そうすると四万一〇〇〇人―三万一〇〇〇人で、一万人が不足するという勘定になった。よって、この不足分を希望退職として募集し、何が何でも二〇万人体制を強行突破していこうというのである。

特に対象年齢（四〇歳〜五七歳）は、一三万人（男九五〇〇人、女三五〇〇）で全体の六割を占めており、「通勤困難」な年齢層であり「団塊の世代」でもあることを狙い撃ちにしてきているのであり、その中でも「転勤や長距離通勤等に不利な女子社員」は約五万人（情案二万人、営業二万人、その他一万人）いるといわれ、今後の「新たな経営施策」合理化は「遠距離通勤や未経験職種への配転など、未曾有のドラマチックな展開を見せるであろうから、かかる事態を予測して退職希望者が大量に発生する職域もでてくる」（通信興業新聞九・六）、「同社はすでに電話交換手の六千人以上削減などの方針を示しており、同部門からの希望退職者の応募が多くなると見ている」（日経九・二）と述べられており、明らかにこの女子社員をターゲットとしていることを物語っている。

第一次で四千百名が応募

N T Tは「あくまで「希望者」だけで肩たたきや個人々への強制はしない」という。しかしに今回に限っていうならば、従来のような労働者を呼び出してY e sと言うまで何日も脅しやスカシをおこなったり、それでもダメなら見切り発車というような露骨な個人攻撃はおこなわないであろう。そのような手法をとらなくとも、一万人という募集数が達成できるとN T Tは自信をもって打ち出しているのである。ただ、第二次募集で目標値を大きく下回った場合は、この限りではないことも十分推測される。

民営化時点三一万四千人いた人員数を現在二二三万三千人までに激減させられてきた職場の実態は、健康や生命さえも奪われるような劣悪な労働条件下に放り出され、もうこれ以上働き続けることができないという条件をつくりだされてきたのである。

特に、女性職場である情報案内では応募率をあげると案内の打鍵を一分間一二〇ストロークや名乗り応対が重要させられ、また、生休・年休のしめつけや日常的な嫌がらせ、さらに貴女の働く所はないと強制配職転等々と凄まじい攻撃に晒されており、営業窓口もN C Cからの奪還をやれ、売上げのノルマを達成しろなどの人権無視の苛酷な条件を押しつけられている。

そのような非人間的扱いのなかで労働者は肉体的にも精神的にもむしろ生まれギリギリのところ立たされており、いつ誰が倒れてもおかしくないという状態に置かれ、労働組合もN T T資本の味方の中、キッカケがあれば辞めたいという気分になせられている。

その上に、「新しい経営施策」合理化で情報案内、営業窓口を徹底した縮小、集約・再編で働く職場を今以上に奪っていき、「大都市の営業へ転職するか」、「さもなくば辞めてもらう」と二者択一を迫ってきているのである。

このような扱いの中でも、生活のため将来のためとふんばってきた労働者に「もうこれ以上我慢できない。辞めるしかない」という状態に追い込み、（健康で安心して働き続ける条件を剥奪していき）涙金をせん別がわりにやり、首を切っていくというやり方である。

「希望退職」とは名ばかりの番号案内嬢ならぬ番号室の「オバサン」を主たる標的にした首切り合理化（雑誌「選択」九三年一〇号）であるというが、まさにその通りである。N T T児島社長の「『』とにか、反響の大きさにびっくりしている」。企業に雇用調整の動きが出る中で、一万人の希望退職募集は大きく騒がれたが「社内は平静」と強調「わ

第1回希望退職「応募」状況 93.10.1~15

部門	男	女	計
電報	37(3)	9(0)	46(3)
情案	48(35)	1087(10)	1135(45)
客サ	820(292)	909(23)	1729(315)
設備	381(126)	54(0)	435(126)
その他	540(283)	188(11)	728(294)
不明	7(3)	1(0)	8(3)
計	1833(742)	2248(44)	4081(786)

年齢別

年齢	男	女	計
40	17(0)	23(0)	40(0)
41	16(0)	26(0)	42(0)
42	16(0)	30(0)	46(0)
43	15(0)	23(0)	38(0)
44	12(0)	11(0)	23(0)
45	53(3)	65(0)	118(3)
46	51(3)	72(1)	123(4)
47	47(3)	76(0)	123(3)
48	32(6)	70(0)	102(6)
49	69(21)	159(0)	228(21)
50	98(36)	184(0)	282(36)
51	88(28)	177(0)	265(28)
52	102(45)	184(5)	286(50)
53	113(52)	167(5)	280(57)
54	147(93)	198(9)	345(102)
55	488(266)	494(9)	982(275)
56	121(74)	80(4)	201(78)
57	348(112)	209(11)	557(123)
計	1833(742)	2248(44)	4081(786)

注：()内は管理者再掲

「全電通」は共犯者

次に、全電通がNTTと同一歩調をとっていかに合理化推進を実施しているかについて見てみる。「あけぼの」の九三年三月号の「情報サービス部門の今後はグループ会社との役割分担による『新しい運営体制』を構築する」とその方向が示されている。そして、役割分担を行う業務は番号案内オペレーションであると述べている。

オペレーション業務は、システム構築とデータベースの整備により定型化されるので、各地方で設立しているテレマ会社へ業務委託し、テレマ会社のパート労働者がNTT社員と同様にエンジェル台を使って案内を行うこととするというのである。

さらに、ご丁寧にも、情報案内センターの委託方式「サテライト」の例として「昨年十月に開設したあるサテライトは、エンジェル台を二〇台設置し、運営時間はウィークデー九時～一九時まで、パート八〇人、出向社員八人という体制で…」と紹介しているのである。

さて、肝心な新運営体制だが、①支社一ヶ所の終日案内局（例、東北なら仙台一ヶ所となる）、②県一ヶ所の終日接続案内局、③県一―三の昼間案内局、④暫定案内局の四段階に区分し①と②についてはNTT社員とパートで業務を遂行し、③と④は委託しパート主体で実施していく方針を打ち出している。

が社は経営全般にわたって合理化を進めていて、人員削減も合理化施策の中の一つにすぎない、「そろそろ辞めようかな」と思っている高齢の女子社員にとっては（退職決意の）相応な引き金になるのでは（東京一〇・六）という言葉がこのことを如実に裏打ちしている。だから、冒頭で述べたように「希望」という名の強制退職（指名解雇）であると強調する所以である。

第一回の応募者の「一般職は二対一の割合で女性が多く、三分の一に当たる一一〇〇人が番号案内係。年齢別では五〇代が四分の三を占めた」という数字がこれらの事を事実として示している。（詳細は次図を参照されたい）

そして、この合理化を実施した場合、平成七年度はN T T社員が五〇〇〇人いればことたれるが、現状から考えると一万五〇〇〇人残ることとなる。従って、前記の③と④を考えたのであり、N T T社員がいなくなれば委託又は廃止するのは当然である。これは悩んだ末の結論であり、情報案内サービス部門の「働き甲斐と雇用の安定」をめざした取り組みであるから理解してくれといっている。

第四七全国大会議案には、よりハッキリと「情報案内サービス部門については、グループ運営として事業展開をはかることを「確認」した」、そのため「平成七年度に向けて業務運営形態をかえる」と記述してある。

その一方で、転進退職者の再雇用を「転進援助制度を活用したグループ会社の雇用のあり方」という言い回しで提案してきているのである。

何のことはない、「強制しないことが守られるなら、一つの選択肢として認めてもいい。企業としての合理化への動きは無視しきれない」（朝日九・一）という全電通幹部の言葉が象徴的にあらわしているように、「N T Tの首切り合理化は必要である」と深い理解を示し、全電通も応援しようと言っているのである。

情報案内の労働者の首切りの手伝いをしておいて、低賃金と劣悪な労働条件のパートとして再雇用し同じ業務をさせようと画策しているといわれてもしかたがない。

連合会長山岸がよく使う「社会の常識」からいっても、職場を奪い、過酷な労働条件下に女性労働者を放り込んで、自ら辞めざるをえない状況にさせて、働き甲斐と雇用の安定だといっているのであるから、これほど矛盾した、社会的にも非常識な方針はない。故に、全電通はN T Tの首切り合理化の共犯者であるという所以である。

首切りで八百億円「節約」

民営化以降、一貫してN T Tが強調、強要してきた節約の本質は労働者の首切り（労働者の節約）に他ならないことはすでに明白である。

今回の希望退職で「今年度は四〇〇億円から四五〇億円の人件費増となるものの、九五年度以降は、毎年八〇〇億円近く人件費が減るなどの削減効果が出る」（毎日九・一）とN T Tは本音を出してきている。また、全電通も「雇用の安定」という、虫食いだらけの古証文をいまだに掲げて労働者を騙し続けているのである。

従来と質・量ともに大きく方向転換した首切り合理化の手法、希望退職で味を占めれば今後とも続けていくであろうし、より大がかりとなってくるであろうことは誰でもが予測できることであろう。

来年早々には、T E会社への分離が行われ、労働者の片道出向がすでに決定されているし、残された職場もより一層の搾取の強化と労働条件の悪化の一途をたどることとなる。

二〇万人体制の次は〇〇万人体制、××万人体制と労働者を首切れるだけ首を切つて資本の増殖を増やし続けていくのが、資本主義社会では「競争に勝つ」唯一の方途であるからである。全国の心ある同志が力を合わせ一万人希望退職反対の火の手を上げ、闘いを広めよう。それが、我々の課題であり、日本における階級的労働運動の再構築に結びつくと考ええるからである。

(N T T労働者・K)

「思想を練り上げ、判断力を養う」

——「学習のすすめ」、よりよい社会実現のために(四)——

古典を読む

岩井章氏が、「科学的社会主義ということ」を「中心に幅広く学習すること」を私達に期待していることは、前回、前々回も書かしていただいたのですが、本人の勧められる書物は何だろうかと思う方も多いでしょう。

次のようにいわれています。

「私は毎月『世界』『月刊労働組合』『まなぶ』『国際労働運動』『労働運動研究』を読み、他に『中央公論』『潮』を寄贈されている。これを読みこなすのは楽ではない。全部読むのは難しいから拾い読みということになる。これらの本からは新しい情報を得る。時には生きるための原則や社会の仕組みについて再発見することもある。しかし、思想を練り上げ判断力を養うためには、古典を読むことにしている。その古典として向坂先生の労働者の世界観と、大森義太郎先生の唯物弁証法読本を薦めたい。」(私の薦める一冊の本『社会主義』九一年一月)。

「古典」といえば、マルクス、エンゲルスによる基本的な「宣言」「空想より科学へ」「フォイエルバッハ論」「賃金、価格および利潤」「賃労働と資本」といったものが頭に浮かびます。そして、世界ではじめて「マルクス、エンゲルス全集」を編集刊行した向坂逸郎と大森義太郎両先生による哲学の書を、岩井章氏はあげられています。「思想を練り上げ判断力を養う」すなわち、基礎体力を養うために何回も読むべき本だということです。

※ 「労働者の世界観」(労働大学刊)

※ 「唯物弁証法読本」(社会主義協会刊)

空想から科学へ、科学ということ

社会主義社会は理想の社会であるというようにしばしば言われます。働く者が主人公の社会であるというようにも言われます。社会主義が人間解放の思想であり、こうした言い方が、間違っているとは思いません。しかし、社会主義という考え方が単に理想の社会であるというのなら、私達は大いなる期待と展望を持って学び、行動することはできないし、友人、知人を説得するのは、難しいように思うのです。

エンゲルスが「ドイツ農民戦争」で述べる次の言葉は多くの活動家に知られていると思います。

「あらゆる理論的な問題をいよいよ明瞭に理解し、伝統的な、そして古い世界観の産物であるおさまり文句の影響からますます離脱し、かつつねに社会主義はそれが科学となつたからには一つの科学としてとりあつかわれなければならない。すなわち研究されなければならない、ということを頭においておくこと。それは指導者の義務であろう。そしてかくして得られ、いよいよ明白にされた識見を労働大衆のあいだにますます熱心にひろめ、党や労働組合の組織をますます強固に結成することが重要であろう。」

社会主義が科学の問題として取り扱われ、研究されなければならないといった認識を、今こそ「活動家」に求められているのではないだろうかと思うのです。

労働運動の現場において、十七年目になるのですが、各種の動員や選挙闘争において、「何人の人が集まった。」「〇〇君はよく出て来てくれる。」ということが、評価の対象となります。そしてこのことは、まちがってはいないでしょう。しかし、これだけでは足りないと思うのです。「ときどき労働者が勝つことがあるが、ほんの一時的にすぎない。かれらの闘争の本来の成果は、その直接の成功ではなくて、労働者の団結がますます拡がっていくことである。」（宣言）という言葉は、私達の運動ではよく引用されます。「本来の成果」である「労働者の団結がますます拡がっていく」には、「学習活動」がなくては難しいと思うのです。

よく、職場や生活実態を交流し、「人間らしい生活をしていない」「当局の人権無視は許せない」と言い、「職場や生活に不満、怒りがあるかが問題だ！」というように組み立てられる場合が多いように思います。もっぱら、こればかりに終始し、これをもって「大衆学習運動」と言っている人もいるように思えます。しかし、「労働者の団結」が本当のものになるには、科学社会主義の理論、思想が必要になると思います。また同じ理論、思想を学んでいる、学ぼうとしているということが、仲間意識を育ててゆくように思います。

「この二大発見、すなわち唯物史観と、剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露とは、われわれが、マルクスに負うところである。社会主義はこの発見によって、一つの科学となった。そこでこの科学はこれについて、その細目と関連とをヨリ十分に研究しなくてはならぬ。」（空想より科学へ）とエンゲルスは述べます。近頃の論調の中には、マルクスとエンゲルスとは理論上、思想上全く同じでなく、マルクスの「資本論」は正しいが、唯物史観から脱け切れなかったエンゲルスは、まちがった、というものもあります。あるいは、ソ連東欧はマルクス・エンゲルスの理想にしたがって建設され、そして崩壊したのだから、これらの理論はまちがっていた、という考えもあるようです。しかし、こうした論調は正しいのか、私は、「唯物史観と、剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露」によって一つの科学となった「社会主義を勉強してゆきたいと思うのです。そして、一緒に勉強しようという人を増やしてゆきたいと思うのです。資本主義とはどういう社会なのか、このことの社会的・歴史的な理解が、労働者や勤労国民の本当の団結を推し薦める大きな力となると思うのです。

「労働者の世界観」「唯物弁証法読本」そしてマルクス・エンゲルスの「古典」は簡単に読めないのですが、ここでの苦勞こそ、急がば回れという言葉が当てはまるように感じます。

社会主義者とは――

昨年より「近代文学と女性像」というタイトル講座の聴講生となっております。講師は長野県国語国文学会会長の東栄蔵です。平林たい子、野上弥生子、丸岡秀子といった人々の作品をとりあげながら、こうした人々の思想や生き方、そして時代背景等について講義をされ、この三月に新宿中村屋を夫相蔵とともに築き、進歩的文化人や社会主義者と、交流のあった相馬黒光と、その作品「黙移」についての講座が最終回となります。

平林たい子の諏訪高等学校時代の、堺利彦との間に続いた文通のこと、アララギ派歌

人の土屋文明に、英語を教わったり、あるいは修身の時間には国定教科書を用いず、芭蕉の「奥の細道」の講義を受けたこと、小堀甚二と結婚するまで、アナキスト山本虎三等四人の男性と凄絶とも言える流転の人生があったこと、そして小堀との別れ等を、また「砂漠の花」等、の作品の紹介は、大変興味深いものでした。そして十七歳で上京したたい子に、堺利彦は「社会主義が自分に割に合うと思ったら社会主義者になりなさい。割に合わないと思ったときにはさっさとやめることですね。その方が本人にも他人にも迷惑が少ない」と言ったのです。

野上弥生子については、「真知子」と宮本百合子の「伸子」との比較、あるいは絶筆となった「森」を題材とした講義でした。「真知子」、岩波文庫版の大内兵衛先生の解題のこと、弥生子を明治女学校へ連れていったのは平民社に拠って活動した木下尚江であり、木下尚江は自叙伝とも言える「森」の中で登場する新聞記者山下のことであるということ、というように、私にとっては興味の尽きぬ内容でした。もちろん、瀬石と弥生子のことについてもです。

この講座は松本中日文化センターの主催で行われ、百三十人の人が熱心に聴講しています。土屋文明、堺利彦、大内兵衛、小堀甚二、木下尚江、そして平林たい子や野上弥生子本人にしても、私達の運動と関係のある人であります。まして百三十人も熱心な聴講生の中に、私が運動の現場で顔を見合やすことのある人は、皆無に近いという現実を、どう考えたらいいのだろうかと思うのです。「真知子」「迷路」「海神丸」「秀吉と利休」といった野上弥生子の作品はちょっとした書店には並べられ、版を重ねて相当売れているのです。年間三万円の聴講代で十二回の講座なのですが、ここに出掛けてくる人達は、一体どんな人達なのだろう。堺利彦、大内兵衛、小堀甚二といった人達についての話を、どのように聞いているのだろうかと思うのです。

文学作品を無理矢理に運動と結びつけようとするのはいかかなものかと思うのですが、私達が「幅広く学習する」という時、こうした文学作品と親しむということも、大切なことではないでしょうか。そして、活動家がこうした素養を身につける楽しみを持てるならば、もっと面白く幅広いことができるようにも思うのです。職場でも、労働雑誌を見る人と、文学作品に親しむ人が、それぞれ、ちがった世界に居合わせているように感ずる時が多いのは、こうした私だけでしょうか。

マルクスは好きな格言は(？)と問われ「人間的なことで私の心をとらえないものはない」と答えています。「資本論」に眼を通せば、マルクスがどのくらい多くの文学作品を読んでいるかを知るでしょうし、マルクスやエンゲルスを語った「モールと將軍」を読めばバツハに興味を持っていたマルクスを知るでしょう。私達はもっともっと、文学や音楽や絵画を楽しむ術を知ること、そして実際に楽しむことだと思います。

「社会主義の話しかできない社会主義者は、社会主義者ではない。朝から晩まで、革命の話しかできないのは、革命家ではない。朝隣の奥さんと顔を合わせたとたんさて社会主義についてとばかり、社会主義の話をし、夕方仕事から疲れて帰った隣の家の若い主人に、さて、革命については、とばかり革命の話をする人間は、うるさがられて、敬遠されるだろう。いわゆる「オルグ」とは、まず、隣の一家と仲よくなる工夫からはじめなくてはならない。」というのは、他ならぬ向坂逸郎先生の言葉(『資本論入門』岩波新書)です。

(中澤秀行)

■ 問題提起 ■

社会党「再生」の真の意味を考える

小選挙区制と我々の進路

昨年来、とくに悪化した社会党の惨状は、細川・小沢疑惑のみみ消し、コメの自由化と自衛隊機海外派遣の容認を行い、今年に入ってから否決された小選挙区制を復活させ、消費税問題でも政権離脱ができず、大増税のレールが敷かれてしまったことに示される。これにより、去年から出ていた黨員・支持者の党離れが激化するだろう。事実小選挙区制がああいう結末に終わって、さっそく離党した人が複数いる。他にも「黨員でいる事に罪悪感を感じる。一日も早く辞めたい」「黨員であり続けられるのか瀬戸際の所だ。社会党という器の維持にこだわらない」「社会新報をやめた」「自分の半生は、何だったのか。青春を返せと言いたい」という声が私の直接聞く範囲でも続出している。これは、全国的な事であろう。きわめて深刻かつ重大な事態である。そしてこの声は、健全で当たり前の気持なのだ。今のままでは、党を辞めたいという仲間を止められない。「とにかく党に残ってくれ」だけでは、何ら展望を示せないからだ。私自身総支部大会か都本部大会で、「分裂」か護憲派の自立の見通しが立たねば、いつでも離党して良いと思っている。

ここではつきり言うしかない。今の社会党の全体を再生するのは、もはや不可能である。小選挙区制が通り、社会党の運命も定まった。放っておいても党は、解体するが、そのような過程で仲間は、バラバラと抜けおち、護憲の党を再建する事は、困難になる。今回の選挙制度改悪は、護憲派が自立せざる得ないように強制した。今こそ社会党の本来の道を歩む仲間は、新しい護憲の党をめざす時が来た。後は、出来るだけ大きな固まりを準備するだけだ（少数でポロポロ出ても仕方ないから）。

むしろ本来出て行くべきは、保守党と合体・同化して生き残りと立身出世を図る輩である。私達が彼らと訣別する前に解党派Ⅱ保守党志向派が出ていたり、党が大分裂した場合、私達が党を引き継げば良い（ただしその場合でも新党的出直しが必要だが）。しかし、これは、相手がある話だ。まして彼らは、主流派である。希望的観測や思惑だけでは、どうにもならない。時期が来たら私達が決断しなくてはいけない。そしてそのための準備をすぐ開始すべきだ。また、私達が行動を起こした後に残された社会党で分裂が起きたり、党が解党され、保守党に行けない人が取り残されたらどうするのか。その時は、護憲の大合流をすれば良い。しかし、願わくばすべての良心的な仲間は、一致結束して同時に新たな道を歩んでいただきたい。

当面は、国会議員の別党派と地方組織での保守党志向派との党内闘争を進めてほしい。兵庫のようにはいかないだろうが、第二県本・第二総支部をつくったり、まともな県本・総支部・支部の連合をつくって護憲派の指令部を確立してほしい。改憲Ⅱ解党派の悪事の告発等条件に応じて工夫して闘う事が必要だ。大衆闘争も護憲派潮流が直接担ってほしい。むしろ党内だけでなく、党外の仲間ともしっかり連携を深めよう。そして時期が来たら護

憲新党を発足させよう。

来年の統一地方選と参議院選は、ぜひ護憲の新しい力でやりたい。総選挙も新しい諸情勢の中で闘う。比例代表区は、各ブロックにより多少違いがあり、投票率にも左右されるが三〇万から三五万票を獲得すれば各ブロックで一議席得られる。九二年参議院東京選挙区で内田雅敏候補が急な出馬で三二万票以上取った事を見れば、決して不可能な数字ではない(ちなみに東京ブロックでは、九三年総選挙の投票率では、二九万五千票で一人当選できる)。

ではめざす党は、どのような党なのか。新左派社会党やミニ社会党であってはならない。社会党という党名や社会主義政党という性格にもこだわらない。

めざす党は、平和・民主主義・人権・環境・生活を守り、発展させる護憲の党、徹底した民主主義の党である。

多様な価値観と運動が共存する共同戦線党である。

党議拘束をはずし、地方分権、自由な討議と民主的方針決定、女性へのクォーター制度、青年や社会的マイノリティの優先的進出を保障した型の党である。

自由・平等・公正・連帯の社会主義(スターリン主義を除く)及び社会民主主義の理念と運動を継承し、同時に自立した市民に依拠したリベラルな市民の党である。つまり護憲の社会・リベラル・市民派の党である。

またもな労働組合と連帯し、リストラ合理化、コメ自由化、消費税アップで切り捨てられる労働者、農民、小商工業者等の働く者の党であり、また生活者としての市民の利益を守る党である。そして社会的「弱者」、マイノリティ、被差別者の側に立つ党である。

党の目標を実現するための具体的な政策を指示し、中長期的プログラムを明らかにできる政党である。

これらを実行する為には、言うまでもなく社会党員だけでなく、まったく新しく出直すつもりで市民運動、進歩的無党派層、女性、若者と結びつかねばならない。誤解を恐れずに言えば、社会党左派党員は、議員等は別にして、黒子や縁の下の力持ちに徹するくらいの気持で新党づくりの意気込みで臨んだほうがよいと思う。

最後に今日の社会党問題は、かつての左右対立ではなく、左右を越えて歩んで来た社会党本来の道を守るのか、保守党に身売りするのかの対立である。自信を持つよう!

(東京・一党員)

思考の翼をひろげ、生き様をぶつける

—— 社会党「再生」への私の思い ——

昨年から考え続けていることを、今年もまた考え続けることとしたい。一個人の思考の限界を痛感しつつ、今年も考えることが、必要なことは、山積みしていると思う。例えば、「科学的」という言葉が、私たちの革新的運動の基盤を形成してきたが、「科学」のどの部分までが実践的に有効なのか、あるいは「教条」にすぎず、実践に不適当なのか。あるいはさらに「科学」の有害性に気づくべきなのか。少なくとも、依拠してきた論理の検証をかなり厳密にやる必要があることは、言うまでもないであろう。この数十年間に培われてきたと思ってきた革新的意義性、運動がかくもたやすく吹っ飛ぶのだから、(ちよつと言いすぎだろうか) 理論の欠陥は否めないと考えても仕方ないであろう。

それにつけても、現状に見られる「参加」路線の限界性は、「社会党」の消滅という悲惨な方向へ向け、ひた走りに走っている。大衆運動に支えられぬ「参加」は、何をしているか分からない。「社会党」への大きな不信心と絶望へと傾斜し続けてきた。今、「参加」路線は、「社会党」を崩壊させる権力側からの戦略的誘導であったことが明かになり、幹部たちの利己的保身以上の何者でもなかったことが、明白になってきている(いかに理由を付けようとも抵抗する主体を掘り崩してきたことは、決定的だ)。「社会党」を政権に追加させて「大衆的小選挙区制反対運動」等、大衆運動を封殺してしまうことこそ目指されてきたのだ。それを連立政権維持を目的化し、国民大衆の利益(コメの自由化・小選挙区制など)を見ようとせぬ幹部たちの軽薄さのなかで、「社会党的なもの」は、自滅していつている。

兵庫が分裂したという新聞記事が政治欄を飾っていた。このまま主体性を奪われてしまうことを考えるなら、自分たちの主張を明確にして政党本来の機能を取り戻すことのほうがうなずける。願わくばと思うだけでは社会党の基本路線への回帰は、不可能だ。本来、路線を揺り戻してきた地方の党員の落胆もかなりのものになっている。翼賛的「新保守主義」との対決を回避することはできない。そのためにもどうしても確固たる階級的結果軸が必要だ。「護憲ネット」等社会党左派・市民派の奮闘が唯一の展望を切り開く鍵となりそうだ。そういう意味で今年も忙しい年になりそうだと思っている。

それにしても、理論的な支柱の動揺もたらすものは、大きいといえる。社会主義路線の再検討は、ヨーロッパ合理主義の根っこから見直さざるをえない部分も大きいと思っっている。生産力主義に依存した経済闘争の重視から、環境や人類全体を視野に入れたある意味では、パラダイム転換を含む大きな見直しになるであろうと想像している。先に書いたように「科学」の「教条」から脱し、類的存在としての新たな「知」を模索しなければならぬという思いが、大きな課題としてのしかかってくる。こんな課題は、従前ならば専門家に任せておけるところだが、新しい「知」は、私たち共同体の中から民主的に生み出されなくてはならないように思えてくる。そのような「知」でなければ、現代巨大科学のように我々の人間性を阻害するようにしか働かなくなるように思える。

歩みはのろくとも疑問だけは失わねば、少しは前に進めるのではないかと楽観しつつ、今年も夢を食うバクのごとき存在たらんと思うのである。

(福岡・Y)

◇ 読者からのおたより ◇

「青稟議員」に敬意 社会党国会議員の、「造反」を私は支持します。今の社会党中央の対応がまちがっているからです。党中央がコメ農家の期待をうらぎって、コメ自由化に賛成し、政治改革を国民にわかりにくいことについて、良心的な労働者、農民に不信感を与えてしまいました。党中央の幹部は、大臣の「いす」を守りたい一心で、働く勤労者、農民のことは、眼中にないのです。党中央幹部が、今のようなことをしている限り、次の選挙は確実に議席をへらすことは、間ちがいないと、私は予想しています。

そして私は、党中央の幹部の不信感から、離党届けを出しました。私が住んでいる、松井田町の人達から、社会党はいったいどうなっているのかと聞かれて、大変困っています。私は今後も、松井田町の人達と、草の根的な運動をつづけていきたいと決意しています。

(富山実 元町議会議員)

「護憲」でまとまる 向坂先生の「日本革命と社会党」の第二章は「左社綱領と社会党の左右の合同」と題され四つの論文が、第三章は「党風確立のために」と題され三つの論文が載っております。「左社綱領」あるいは「道」といったものを感じ入って、この道に首をつつ込んだまま「額」までつかり込んでしまった私ですが、「綱領」を大切にしてい、自分達の血と肉として来なかったこと——、理論を大切にしてい来なかったこと——、そして、「日常闘争は事務をつうじて展開されるほかない」(一〇六P)ということをおろそかにして来たことのツケが、今の運動の現状になって現れて来ているように思えてなりません。「ネット」のことについて言うなら、全国的に見て、どのような人が、各地で先達のな役割をしようとしているのか、このことが一番の気がかりです。大声で威勢よく話ができる人ばかりが、いくら集ってみてもダメなのではないか。心配のタネはたくさんです。しかし「護憲」でまとまること、これが目下の重大事です。微力ですが、ボソボソと頑張ります。

(自治労・H)

ある日突然 私は昨年九月、ある日突然強制配転(総務主任の平行移動)をさせられました。理由を聞けば、いややったらほかへ行ったらええやん、と(案に退職させほのめかす)職場で配転の挨拶も紹介もさせてもらえませんでした。

新局では飲み友達作り、仲間作りに、新しい気持ちで取り組んでいます。当局に対しては、仕事初めのミーティングの場で解らないこと、おかしいと思うことには質問をすることにしています。一度目の質問は、管理者が年末に倒れて入院、職場で起きた事でありみんなも心配している?で状況の報告を求めたのに対してこの場では答えられない。二度目は(通信No五六三春闘の経済学で労働者は労働力は売っても人格は売っていないに勇気づけられ)本省から労働実態調査が入る、当局が決めた二人に一日付きつきりでチェックをすると、「人選の基準は」と質問したのに対し、課長に呼ばれて注意され、部長室にも呼ばれて四〇分、五人の管理者の前で、組合の合意も得得である、当局が決めたことに、しかもみんなの前で総務主任として、質問していいこと悪いことぐらいわからんのかアホと、罵声を浴びせかけられました。

職場は不況を口実に営業のノルマを押し付け、協力しない役職者には資格がないと降格

(昨年一人私が配転されてから)をはっきり言ってくる。闘う仲間、支援してくれる仲間を作るために頑張りたい。通信の購読者が増えました。二月十七日振り込みましたのでよろしく願います。

(全通・K)

なにがなんでも勝つ! 寒波もひと段落した今日この頃です。東京の方は如何でしょうか。北海道と大阪の中労委命令についてこちらでも報告集会がありました。中味はあきれる程のものですが、しかし、命令を出させた事、こうして闘い続けられる事は喜こぼうと夫とも話しています。一月二十日よりまた上京中です。

(国労家族会・N)

積雪十三メートル お元気ですか。こちらはすでに降雪量が十三メートルを越えました。例年になく大雪です。昔では「これがあたり前」だそうです。

さて、中労委命令が十二月二四日に出され今日まで様々な意見が出されていますが問題を整理しながらどう受けとめるのか、という態度の明確化をさせるよりも、私としてはこの命令が出されて来た背景を政治的・経済的・労働運動的にどう考えるのか、それとあわせて情勢としての「リストラ」時代における状況から闘争方針、かまをどう積み上げ、全体的に明確にする。そのためにすべての闘争団において、又すべての国労分会においてその学習会、討論を強めるべきであると考えますがいかがでしょうか。又、今回の命令をどう考えるか、これは国労と共に共闘してきた労働者層がじっくりと自分達の実態から考える必要が重要になっています。これからの勝負です。じっくり腰をすえて、目を内むきせず外向きにして国鉄闘争を前進させましょう。

(自治労・M)

学習会の「あゆみ」をつくる 十二月は忘年会を兼ねて行いましたが一月は個人的な忙しさに負けて毎月一回の学習会にとうとう穴をあけてしまう所でしたが、仲間から「日程は決まったの?」と聞かれあわてて三日後に設定しました。にもかかわらず多勢の仲間が参加してくれ内心ホッとしています。忘年会では尾嶋さんや中山さんも参加し大いに盛り上りました。その中でも話されたことですが、一度、これまでのニュースをまとめたたり他の資料も揃えて八王子地区チューター学習会の「あゆみ」みたいなものを作ろうという計画があります。というのも、実は以前テキストで「吉田松陰」を終了した時に、みんなに感想文を書いてもらい「このテキストを終えて」ということでまとめて出そうとしましたが、もう少し待って一人でも多く集めようと思っっている間に出す機会を逸してしまい五人の感想文はお蔵入りとなったままなのです。

これに是非、目の目をみせてやりたいということと、他の仲間からも「何で「吉田松陰」がテキストになるの?」という印象をもっていた、と言われるように、私自身もあの本に幾度となく出てくる「御座候」という昔の文章がさっぱり分らなく嫌気がさしたと同時に本を読んだり学習会に参加するきっかけとなった「吉田松陰」をもう一度考えてみたいということ。そんな事で地道に学習会を取り組んでゆきたいと思っますので、これからも御協力をお願いします。

(八王子地区チューター学習会・増野喜代教)

一部拡大 社会通信一部拡大です。(有)クーカズ設立し忙しい毎日です。強固な自活体制を作り、運動に生活にゆとりを持って、納得できる解決の日まで南の地鹿兒島で家族を含めて頑張りたい。又会える日を楽しみに。

(国労鹿兒島地本・藤崎)

社会主義者の根性で 社会党をなんとしても守りとおすことが必要です。日本の労働者のためにも。社会主義者の根性をもって。

(群馬・K)